

The Old Familiar Faces

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学文学部 公開日: 2024-09-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐藤, 全弘 メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2005674

Title	The Old Familiar Faces
Author	佐藤, 全弘
Citation	人文研究. 45 卷 3 号, p.245-250.
Issue Date	1993
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	Studies Dedicated to Professor Emeritus Masahiro Sato

Placed on: Osaka City University Repository

人文研究 大阪市立大学文学部紀要
第45巻 第3分冊 1993年 127頁～132頁

The Old Familiar Faces

佐藤 全 弘

1

大阪市立大学に法文学部が設けられ、国立大学に先んじて入試を行い、第一期生が入学したのは、敗戦後4年の1949年5月のことだった。当時の大阪はまだ焼跡が目についた。旧制大阪商大の杉本町の学舎は、戦争末期に海兵団に貸していたため、軍事施設として米軍に接收されていた。(私の出身校大阪府立堺中学校も、体育館を陸軍の弾薬箱置場に貸していたので、戦後しばらく進駐軍に取られ、米兵がトラックで乗りつけてバスケットボールに興じていた。)

新学制のもと、気鋭の教授陣がそろったものの、設備はまったくお話にならなかったが、これも敗戦国ゆえいたし方なかった。学舎は旧道仁^{ドウニン}小学校(文系教養と事務局)、旧扇町商業(理工)、元精華女専(家政)、旧明治小学校(図書館と文系研究室)、旧大宝小学校(書庫)、元鞆商業学校(文系専門)とみごとな蛸足だった。入学式はこれらの中で一番立派な家政学部の講堂で行われた。(これらの校舎も今は取り壊されたり、中央会館、中央図書館、公団住宅に建てかえられたりして、明治小学校だけが小学校として残っている。)

当時の文系3学部の定員は今の3分の1で、みな揃って講義をきいた(語学と専門科目は別として)。1回生しかいないので、当然1回生から専門科目があった(文学概論とか古代哲学史など)。それゆえ文系学部の学生には連帯感が今より強かった。一般講義は講堂で行われ長椅子で何百人もが聴講した。私語はなかった。体育は学部別に行われたが、ピンポンとバレーボール以外何の設備もなく、徒手体操が主で出席重視、生まれてはじめて100点をもらってびっくりした。

発足当初の法文学部文学科哲学教室は、坂田徳男教授と 武田弘道助教授

の2人だけ、ややおくれて森信成講師・山本新之助講師が加わり、翌年から西村嘉彦助教授、翌々年からは山田晶・森口美都男両助手、そして諸戸素純助教授が着任、一まず陣容がととのった。

初年度は坂田教授の古代哲学史と武田助教授の論理学があった。後者は成績は平方根にして10倍するともっぱらの噂で、じつに理解しにくい講義だった。坂田教授は講義にじつに激しい熱意をこめられ、授業中無断退席する学生があると、直ちに廊下へ追って行き、烈しく詰問された。

当時は教室も教員数も少ないため授業提供も少なく、出された科目はほとんど聴いた。背中の破れたワイシャツを物ともせず唾をとばして話される山根徳太郎教授の日本史、シュロの葉で編んだ買物かごにノートをいれての川喜田二郎助教授の人文地理、朝山新一教授と梅棹忠夫講師の生物学、黒田亮一助教授の日本国憲法などが印象にのこる。とりわけ望月信成教授の西洋美術史と日本美術史は最も興味あふれるもので、前者の学年末試験問題は“*What is Modern Art?*” 1題だった。

出版事情の極端に悪かった当時のこと、講義はほとんどノート中心、したがって試験前になると新聞部が、ととのった学生のノートをガリ版刷りにして売り出した。私もたしか1科目50円でノートを提供したが、民主主義をDemo. というように略号を使っていたので、客から不平が出たときいた。

洋書はとっても高価で入手しにくく、外書講読のテキストは先生がタイプで打って下さった。また部数がまとまれば生協に頼んでガリ版刷りにしてもらったり、それもかなわねば手写した。手写は決して時間の無駄ではなく、理解する上に大いに役立った。コピー機が登場するのは20年後の1970年代のことである。

2

学部4年間に授業で使われた哲学書を列記しておこう。

坂田教授は1回生の初めから課外の時間をもうけて下さり、旧制商大や商・経・法の有志学生も含め、6、7人でKant, *Kritik der reinen Vernunft* の第2版序文をMeiklejohnの英訳で読んで下さった。ドイツ語を修めた2回生からは、もちろん原文で、私はErdmann編集の大きな1冊を図書館から借りた。また、これも課外で、Platon, *Apologia* を岩波から出た田中美知太郎の注釈付きで学んだ。そのほかHume, *Enquiry Concerning Human Understanding* も1年教わった。(坂田教授はつとにこれを訳出しておられ、その

未刊の訳稿は今も私の手もとにある。)

西村助教授からは Bergson, *Introduction à la Métaphysique* を英訳で教わった。森講師はテキストの Berkeley, *Three Dialogues between Hylas and Philonous* を 2、3 回よんで、あとはテキスト抜きの話となった。山本講師からは Kant, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten* を 1 年学んだ。山田講師からはラテン語文法を 1 年学んだあと、Thomas, *Summa Theologica* の一部分を教わった。トマスのは幸い福田文庫にいろんな版と各国訳のものがそろっていた。武田助教授からは、松平千秋と田中美知太郎のギリシャ語文法書をもとに、ギリシャ語の入門を学んだ。例文をギリシャ語のタイプで打ってこられたのにはおどろいた。

非常勤講師としては相原信作阪大教授（倫理学）、大井進大阪外大助教授（倫理学史）、佐々木現順氏（インド哲学）、野田又夫京大教授（哲学特講、集中でカントからヘーゲルまで）、そして杉原氏（精神病学）と多彩な顔ぶれだった。受講者は哲学専攻の 2 人から 3 人に他専攻の学生がちらほらで、親しく教わった。杉原講師の試験は医学部なみの口頭試験だった。相原講師は授業のあときまって、大阪でもまだ少なかった茶亭で甘いものを振舞って下さった。

1953 年 3 月の卒業式は、51 年 9 月調印されたサンフランシスコ講和条約に従って一部返還された杉本学舎の講堂で行われた。学部在学中杉本学舎へ足を踏み入れたのは、あとにも先にもこの日一日だけだった。阪和線踏切の東には米軍の 'CAMP SAKAI 279th GENERAL HOSPITAL' と銘打った高いアーチが道幅一杯にかかり、道の中央には 'STOP' の字もいかめしい MP（憲兵）の検問所があり、今の理系学舎のあたりには十数棟の白ペンキ 2 階建の兵舎が立ち並び、ポール上には星条旗が高くひるがえり、グラウンドでは米兵の教練の号令が響いていた。キャンパスの樹という樹には、目の高さまで白ペンキが塗られ（夜にぶつからぬためか？虫除けか？）、トイレには英語の落書があった。

返還当初には各室スチーム設備があったが、これは米軍用のものでほどなく撤去された。当初 5、6 年は暖房は一切なし、街全体が今よりずっと寒かった当時のこと、講義される先生も冬はオーバー着用、学生は外套を座布団代りにして、かじかむ手先を太股の下にはさんでノートを取るしまつだった。1955 年頃からは入学時に学生から暖房費を別に納めさせ、それで石炭ストーブが入りはしたものの、研究室や小教室にはいぜんその備えもなく、大学院

の授業を火の気ある図書館の受入係室で受けたことさえあった。

今は鬱蒼と緑樹が茂り、昼なお暗いおもむきさえある靉公園は、戦争末期の疎開跡地で、戦後は米軍の小飛行場となり、ヘリコプターやセスナ機がたえず発着して騒しかった。

文学部が独立した1953年4月から大学院修士課程が開かれたのは、社会、地理、国文、中国、英文、独文の6専攻で、哲学、心理、東洋史、仏文の4専攻はスタッフ不足で1年おくれた。哲学の大学院は、ギリシャ哲学の鹿野治助教授を迎えて成立した。

この空白の1年間には西村助教授から Husserl, *Cartesianische Meditationen* をよんでもらった。テキストは先生自らタイプで打って下さった。

修士課程では、坂田教授は Kant, *Kritik der Urteilkraft* を、西村助教授は Descartes, *Meditationes* をその *Objections* をもこめて、諸戸教授は Schleiermacher, *Über die Religion* を、鹿野教授は Platon, *Politeia* をテキストに使われた。

博士課程では、坂田教授からは Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Bergson, *Les Deux Sources*, *La Pensée et le Mouvant* を、鹿野教授からは Plotinos, *Enneades* を Bréhier 対訳の6巻本で、西村助教授からは Descartes, *Ragulae* を、諸戸教授からは龍樹の「中論」を漢訳で学んだ。

相原講師はひきつづき来て下さり、野田講師も出講され、ほかに塚本善隆講師からは仏教学（とくに中国仏教史）を、有賀鉄太郎講師からはキリスト教学を（これは英語で）教わった。

3

創設以来の哲学教室の45年間を通観すれば、次の4つの時期に分けられようか。各時期につき、簡単なコメントをそえたい。

（1）草創期（1949—54）……出発当初2名だった教員も、この間に9名となった。研究室も当初は旧明治小学校に1室だけだったが、杉本地区に移って、教養地区2号館2階に1室が用意された。

（2）整備期（1954—68）……大学院修士課程・博士課程の発足。研究室は、今の専門生協のところにあった木造の旧経研棟の1階に2室与えられた。主に大学院の演習・講義に使われた。さらに60年12月には文系棟（今の文学部棟の東半分）ができて、数室が割当てられた。62年10月には定数制がしかれ、哲学教室は専門では教授4、助教授3、助手1の計8名、教養では教授・助

教授各1の2名、計10名と定められた。62年3月で、坂田教授が定年退職された。

石油ショックのあほりをうけて、64年10月1日現在の欠員は凍結となり、哲学教室も1名が凍結となって今に至っている。

65年3月に鹿野教授が定年退職され、ついで山田・森口両助教授が相ついで京大へ移られた。

(3) 学科制期(1968-83) ……68年度から文学部は5学科制に移り、哲学は1学科1専攻となった。69年3月24日1号館封鎖をもって始まった大学紛争は、10月4日の解除まで大混乱をひきおこした。71年から学部・大学院ともカリキュラムを改訂し、今日に及んでいる。(94年度からは学部は新カリキュラムとなる。)

68年4月に家政学部から哲学へ樋元和一教授が移籍され、教養定数は教授1、助教授2、教室定数は11名(うち1名凍結)となった。

紛争中の心身の労がひびいてか、諸戸教授(70年)、森教授(71年)と相ついで在職死亡された。また、山本教授(70年)、樋元教授(72年)、西村教授(79年)、鈴木照雄教授(71年着任、82年退職)、武田教授(83年)と定年退職者がつづいた。

(4) 世代交替期(1983-94) ……この時期になって教室全員が新制大学卒業生となった。研究室も文学部棟から経研棟4階へ移った。

1991年7月に文部省が行った大学設置基準の大綱化にともない、本学でも教養部は93年度をもって廃止され、一般教育カリキュラムも大幅に改訂されることとなった。また第2部の改革はすでに何度か学内討議の結論が出されていたが、生涯学習・夜間大学院開設の動きとあわせて、すでに日程にのぼりつつある。専門課程のカリキュラムも改訂されることにきまった。ここ数年は第5番目の変革期となるはずである。

4

哲学教室の創設以来、25人の専任教員が研究教育に当たってきた。その中ですでに8名の方々が幽明境をことにせられた。年次順にあげると、諸戸素純教授(70年)、森信成教授(71年)、樋元和一教授(82年)、武田弘道教授(84年)、坂田徳男教授(84年)、山本新之助教授(86年)、鹿野治助教授(91年)、森口美都男助教授(93年)である。

大阪市大哲学教室には、個性ゆたかな教員がそろっていた。設備は乏しく、

予算も不足がちで、教室の態勢またときに協調を欠くくらいが無いではなかったが、そのかわり、自由と独立の気がつねに満ちていた。近年は調和もともに加わったと言えようか。

また講座制でなく教室制をとったために、古代から現代まで、英・独・仏はもとより仏教にいたるまで、広く学ぶ機会がそなえられていることは、大きな特色である。

今大阪市大全体が変革期を迎え、文学部もそのはげしい渦の中にある。哲学教室もとより例外ではない。しかし世界と人間にかかわる一切についての根本原理の探究としての哲学そのものは、微動だもしない。人去り、人來り、学園に高楼が並びそびえ、電子情報化がすすむ時となっても、哲学的精神は小ゆるぎもしない。この大阪市大哲学教室にあって、真理探究の道に就くことができたことを、私は心から感謝している。

45年間、思えば人生の3分の2を、私は大阪市大哲学教室とともに送ってきた。諸先生の期待に十分に応ええず、後輩諸兄にもすこしも役立ちえなかったことは、まったく申しわけもない。しかも真理探究の道はなお遙遠であり、その道みち摘むをえた美しい小花を共に喜んで下さる恩師も、もう数少なくなられた。机を並べて学んだ友も姿を没した者が少くない。飛び去り行きし日々、年々、交った友垣を思い浮かべるとき、チャールズ・ラムの句がくちびるにうかんでくるのである——

I have had playmates, I have had companions,
In my days of childhood, in my joyful school-days —
All, all are gone, the old familiar faces.